

バベル

2007(平成19)年3月20日鑑賞(試写会・御堂会館)

★★★★



監督・製作・原案＝アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ／出演＝ブラッド・ピット／ケイト・ブランシェット／ネイサン・ギャンプル／エル・ファニング／アドリアナ・バラッサ／ガエル・ガルシア・ベルナル／役所広司／菊地凜子／二階堂智／ブブケ・アイト・エル・カイド／サイド・タルカーニ／モハメド・アクサム (ギャガ・コミュニケーションズ配給／2006年メキシコ映画／143分)

……アカデミー賞作品賞・監督賞ともマーティン・スコセッシ監督の『ディパーテッド』に敗れたものの、テーマの奥深さと問題提起の時代的タイムリーさではこちらの方が上……？ モロッコ・アメリカ・メキシコ・日本でバラバラに展開される物語を結びつけるものは一体何……？ また4つの物語が行き着くところは……？ そして心の結びつきを失った、夫婦・父娘・兄弟たちの再生は……？ さらに日本人としては、アカデミー賞助演女優賞にノミネートされた菊地凜子のヌードシーンを含む体当たり演技は見逃せないもの……。静かで美しい音楽に身を委ねながら、「バベル」についてじっくりと考えてみたいものだが……。

バベルとは……？

旧約聖書には「ノアの方舟」をはじめとする面白い物語がたくさんあり、「バベルの塔」もその1つ。プレスシートにまとめられている『旧約聖書 創世記11章』の物語は、「遠い昔、言葉は一つだった。神に近づこうと 人間たちは天まで届く塔を建てようとした。神は怒り、言われた。“言葉を乱し、世界をバラバラにしよう”。やがてその街は、バベルと呼ばれた。」というもの……。

私がいつも書いていることだが、キリスト教の神様は、神に従う人間には優しいが、凶に乗った人間や反抗する人間に対しては、わりと「怒りんぼ」で実に残酷な処罰を下しているが、「バベルの塔」の物語もその1つ。たしかに、人間が

神に近づこうとしたのは悪いかもしれないが、そうだからといって、言葉をバラバラにし人間同士を互いに理解させないようにまでしなくてもいいのでは、と思う面も……？ その結果、この映画の物語のように、モロッコ・メキシコ・アメリカ・日本（東京）という4つの地域における4つの互いに何の関連性もない、バラバラの人間によるバラバラの物語が登場することに……。もっとも、そんな全然脈絡のない4つの物語は実は……？

それが、アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ監督がこの映画で描きたかったテーマ。したがって、この映画を観た私たちが今後目指すべき方向は……？

この映画については、ごく抽象的な評論にとどめればそれですむのだが、その面白さや奥深さをわかってもらうためにはどうしてもストーリーを紹介しなければならず、ネタバレになってしまうことに……。しかし私としては、自分の感動を表現するために、ネタバレになることを覚悟のうえで、以下書くことにしたい。したがって、こんな名作に限っては事前情報なしで、と考える方は映画を観たうえで読んでもらいたいもの……。

最大の話題性は、やはりこの人……？

この映画は4つの物語が同時並行するものだから、主演男優や主演女優を選ぶ



©2006 by Babel Productions, Inc. All Rights Reserved.

賞にはもともと不利な構成の映画。またアレハンドロ監督も、『21グラム』（03年）等では有名だとはいっても、メキシコ人監督だから、日本人にはなじみが薄いもの。したがって、この『バベル』という映画を世界から注目してもらうためには、やはり有名俳優をキャスティングするのが一番……。アレハンドロ監督がそう考えたかどうかは知らないが、ブラッド・ピットをアメリカの物語に起用したのはその狙い……？

ちなみに、ブラッド・ピットは香港映画『インファナル・アフェア』に惚れこみ、その映画化権を買い取った時点では、当然彼自身が主役として登場するものと思われていたが、主演をレオナルド・ディカプリオとマット・デイモンに譲り（?）、自らはプロデューサーとして参加したが、それはこの『バベル』に出演するため……？

そんな中、結果的に『ディパーテッド』と『バベル』がアカデミー賞の作品賞・監督賞を争ったのは皮肉なもの。いや、そうではなく、それは彼にとってこれ以上ない名誉というべき……。

ブラッド・ピットも役所広司も本来しんどい役……？

日本の物語に登場したヤスジローを演ずる役所広司は、そもそも出番が少ないうえ、聾啞者の娘チエコ（菊地凜子）との確執に悩む父親という役。しかも、プレスシートにあるアレハンドロ監督の言葉によれば、「この父親は数シーン登場するだけだが、観客の記憶に残る演技ができる俳優でなければならなかった」との考え方で起用したのだから、役者にとっては本来しんどい役。しかし、それをきちんと演じてこそ、日本を代表する名俳優……。もっともヤスジローといういかにも小津安二郎を彷彿させる命名はいかがなもの……？ 日本人は別に黒澤や安二郎ばかりではないのだから、ブラッド・ピットの役名と同じように、もっと今風の普通の姓名にしてほしかったが……。

それはともかく、役所広司演ずるヤスジローと同じように、ブラッド・ピット演ずるリチャードも、妻スーザン（ケイト・ブランシェット）との間に問題を抱え、そこから抜け出す新たな生き方を見つけるべく、夫婦でモロッコ旅行にやってきたもの。しかし、ツアー中にみせる2人の姿を観ていると、アメリカを離れ

異国を旅行し、「非日常」の世界に身を置いたとしても、その壊れた夫婦関係の再生は難しそう……？ ところが、それがあつた大事件の発生によつて……？

発端は一発の銃弾から……

ツアー旅行はそのほとんどが「〇〇様ご一行」のバス旅行になるが、そこで興味深いのがバスの座席。つまり、日替わりメニューのようにその日ごとに座席が変わるのか、それとも〇〇夫婦は〇〇席、△△親子は△△席と事実上固定するのか、ということ。ツアー会社によつて座席が指定されることはまずないから、そんな座席取りにみるツアー旅行の人間模様も面白い……？

それはともかく、リチャードとスーザン夫婦が並んで座つている席はバスの左側で、前から3、4番目あたり。そして当然スーザンが窓側でリチャードが通路側。ツアーは全員で40名ぐらいだから、モロッコの険しい山間の村で暮らすアブドゥラの息子ユセフ（ブブケ・アイト・エル・カイド）が放つた一発のライフルの銃弾が、スーザンの鎖骨の上を撃ち抜いたのはまさに偶然。そして予測不可能な不運としかいいようのないもの。しかし、「テロの危険ゼロ」という前提で企画されているモロッコのツアー旅行中に、なぜアメリカ人市民が銃弾に倒れたの……？

モロッコ班は素人ばかり……

アブドゥラが知り合いから1挺のライフルを買つたのは、生活の糧であるヤギを襲うジャッカルをやつつけるという生きていくための必要性から……？ もっとも、素朴な村の住人だけに、その管理には甘い面があるが、子供たちを含めて全員が何らかの仕事を果たさなければ生きていけないアブドゥラにとっては、ヤギの管理を長男アフメッド（サイド・タルカーニ）と次男ユセフに委ね、そのためにライフルを丸投げにしたのはやむをえないところ……。そして、そのライフルから発射された1発の銃弾がスーザンに当たつたのは、たまたまアフメッドは下手くそだったが、ユセフは射撃の腕がよかつたため。

つまり、バスを狙つて試しに撃つた弾が、ホントにタマタマ命中したにすぎないのだが、犯人が挙がるまでは、テロの可能性を含めてこの事件が国際的な政治

問題となり、緊張状態を引き起こしたのは当然。ちなみにアメリカ班には、ブラッド・ピットとケイト・ブランシェットを、日本班には役所広司をそして後述のメキシコ班にはガエル・ガルシア・ベルナルをそれぞれ起用したアレハンドロ監督だが、モロッコ班では現地で暮らす素人ばかりを起用している。もちろん、それは経済的理由によるものではなく、よりリアルさを出すため……。

アメリカに残る子供たちは……？

アメリカには、家政婦のアメリア（アドリアナ・バラッサ）と共に息子マイク（ネイサン・キャンブル）と娘デビー（エル・ファニング）がリチャードとスーザン夫婦の帰りを待っていた。そしてこの映画にメキシコの物語が登場するのは、アメリアがメキシコで挙式する息子の結婚式のために、2人の子供を連れて国境を越えてメキシコに行ったため。

2人の子供をアメリアの知り合いが預かってくれれば良かったのだが、運悪く誰も都合がつかない。知らない人に預けるくらいならいっそ一緒に連れていった方が、そうアメリアが考えたのは決して不自然ではなかった。そして、現にメキシコで挙げられた息子の結婚式は盛大で楽しいもので、子供たちも大はしゃぎだった……。

メキシコの物語には、あのガルシアが……

問題が発生したのは、帰路、車を運転していたアメリアの甥のサンチャゴ（ガエル・ガルシア・ベルナル）が、国境警備隊によって飲酒運転を指摘されてから。

近時、「危険運転致死傷罪」が新設され、刑事処罰が強化されている日本の飲酒運転事情と異なり、メキシコあたりでは飲酒運転はたいしたことではない（？）が、問題は、後部座席で眠り込んでいたマイクとデビーがアメリアと何ら親族関係もないうえ、アメリアは16年間もアメリカで不法就労を続けていたことがバレたこと。そんなこんな小さな行き違いが重なった挙げ句、甥のサンチャゴが取った行動は最悪のもの……。

国境警備隊の追及にイライラし、ついにプッチンと切れてしまったサンチャゴを演ずるのは、『キング 罪の王』（05年）でサンチャゴとは正反対のクールな

「罪の王」を見事に演じたガエル・ガルシア・ベルナル。今やすっかり大人じみてきた、アメリカで最も有名な子役ダコタ・ファニングの妹であるエル・ファニングのかわいい名演技と、このガルシアの荒々しい名演技をメキシコの物語ではじっくりと……。

残念だが、ノミネートだけで十分……

私はアカデミー賞助演女優賞にノミネートされるまで菊地凜子という女優の名前を全く知らなかった。2月25日の授賞式で黒のイブニングドレスを着て、レッドカーペット上を堂々と歩く姿を観て、はじめてその顔をインプットした私のような人も多かったのでは……？ 聴覚障害の娘チエコ役が菊地凜子に決定したのは、元々聴覚障害のある女優を起用しようとしていたのに、なかなかその適役が見つからなかったことと、菊地凜子が役の保証など何もされていないにもかかわらず、手話の訓練を始めていることを知って、アレハンドロ監督がその熱意に感激したため、とのこと。

こんなエピソードを聞くと、彼女が偶然や幸運だけでアカデミー賞にノミネートされたのではないことがよくわかる。この映画における彼女の熱演ぶりは、手話の名演技だけではなく、聴覚障害を持つことによって受けるさまざまな差別に対する憤りの表現に顕著。もっとも彼女は1981年生まれだから、授賞式で見せたのが本来の姿で、太もも丸出しの超ミニのプリーツスカートをはいた女子高生の顔は本来ムリ筋のはずなのだが、そんな違和感を全く感じさせないところがすごい。そして助演女優賞にノミネートされたのは、若い刑事ケンジ（二階堂智）をはじめとする、何ともすごい男たちへの迫り方（？）と迫真のヌード演技……？ そんな「ナンシー梅木」以来、49年ぶりのオスカーノミネート女優の熱演は、是非あなたの目でじっくりと……。

錯綜する4つの物語が行くつくところは……？

バベルの塔を最も端的に象徴するのは、ヤスジローとチエコが住む東京の超高層マンションだが、スクリーン上で展開される4つの物語はそれぞれ別々のものであり、語られる言語そのものもバラバラ。その上アメリカ人夫婦、メキシコ人

のおばと甥、日本人の父娘、そしてモロッコ人の親子と兄弟らの関係もみんなバラバラ……？ こんな風にしてすべてがバラバラになってしまったのは、神様が人間に与えた罰のせいだが、実はこの4つの物語を結びつける何かがある……？ そして、それがこの映画最大のポイント……。

もっとも、その何かをもって4つの地域と4つの物語が結びつくとしても、人間の気持が結びつかなければダメ。しかし、これだけバラバラになってしまった人間の心が再び結びつくなんでホントにできるの……？ それこそがこの映画の持つ大きなテーマであり、その奥深さこそ、この映画がアカデミー賞作品賞・監督賞にノミネートされた理由……。

4つの物語が交錯しながらスクリーン上に登場してくるが、きわめて流れよく構成されているから、理解が困難になることは全くない。したがって、「難しすぎるのでは……」という心配は全く無用。あまり、身構えずこの名作を楽しんでもらいたいものだ。

音楽のすばらしさにもうっとり……

アカデミー賞7部門にノミネートされたにもかかわらず、最終受賞は1部門だけになってしまったが、その死守した部門こそ作曲賞。といっても、この映画は音楽が主役ではなく、あくまで錯綜しながら進められていく4つの物語を観客が理解し味わうのを助けるために流される(?) 静かなもの。

人間の頭は不可思議なもので、静かだからじっくりスクリーンに集中でき、頭の回転もよくなるというわけではない。むしろ頭の回転を助けてくれる心地よい音楽のバックアップがあれば、その方がベターなことが多い。音響賞と共に作曲賞も『ドリームガールズ』(06年)のようなミュージカル映画の方がフィットする感が強いから、今回『バベル』の静かな音楽が作曲賞を受賞したのは立派。この静かな音楽のすばらしさにうっとりしながら、この映画の奥深さを味わってもらいたいものだ。

2007(平成19)年3月22日記